

やり抜く覚悟が

特集1

受験、就職活動、仕事、経営——人生の岐路に立った時、「やり抜く力」が必要だ。どんな状況下でも掲げた目標実現に向けて徹底的に意志を貫き、企業を成長させてきた経営者たちの在り方を取材した。

取材・文 川内イオ

かわうち・いお
1979年生まれ。広告代理店勤務を経て2003年よりフリーライターに。著書に『稀食満面 そこにしかない「食の可能性」を巡る旅』(主婦の友社)など。

» P19 事例1 エリーパワー株式会社 代表取締役会長兼CEO 吉田博一

» P22 事例2 世界のブエノチキン合同会社 代表 浅野ブエコ朝子

» P25 事例3 弘栄設備工業株式会社 代表取締役 船橋吾一

勝機をつかむ

少子高齢化が進むなかで
高齢者も働く役割がある

——吉田さんが、蓄電池の開発に踏み切った理由を教えてください。

吉田 住銀リース時代、日本にはリースが終わった大量の物を処分する場所がなく、困っていました。それをきっかけに環境問題に関心を持つようになった時期に、母校の慶應義塾大学が開発したEV(電気自動車)に偶然試乗する機会がありました。その時、増え続ける世界中の自動車にEVに変えたら地球環境に貢献することができると確信しました。それで新しいEVを開発するための研究資金を集め、普及活動のサポートをしていたら同校から声がかかり、二〇〇三(平成15)年、教授に就任しました。

——慶應義塾大学で作ったEVを通して蓄電池に出合ったのですね。

吉田 はい。新しく開発したEVに使用した蓄電池は一台分が約二〇〇〇万円もするうえに、トラブルも多かった。EVを普及させるためのカギは、蓄電池だと思ったんです。環境のことを考えれば、太陽光、風力、地熱などの再生可能エネルギーを使

うにも、原子力発電の電力を無駄なく使うためにも蓄電池が必要になります。それで、当時はパソコンで使うような小型のリチウムイオン蓄電池しか量産していなかった日本の大手メーカーにこれから大型リチウムイオン電池が必要になるから作らないかと声をかけたのですが、全社から「あんなに危ないものを大型化できない」と断られました。それなら自分たちで作ろうと、二〇代、三〇代のメンバーと四人で起業を決めました。当時講師で三三歳の若者だった河上君が今年社長になり、これから会社を引っ張っていきます。

——六九歳で、若いメンバーと一緒に新たな挑戦することに躊躇はありませんでしたか？

吉田 私が銀行の常務だった五二歳の時、ロンドンに赴任しました。そこで、イギリスは自分と違うことをする人をリスペクトできる社会だと思いました。このような社会が新しいモノゴトを生み出すのだと実感したのです。だから、高齢での起業でしたが、年齢の差は気になりませんでした。

事例1

六九歳で起業した 元バンカーの志

蓄電池の国内トップシェアを誇るエリーパワー。創業者は六九歳の起業家・吉田博一(現・住友銀行現・三井住友銀行)副頭取、住銀リース(現・三井住友ファイナンス&リース)で社長、会長などを務めた元バンカーが、新たな分野に挑む！

エリーパワー株式会社
代表取締役会長兼CEO 吉田博一

【会社概要】

▷設立 2006年

▷事業内容 大型リチウムイオン電池および蓄電システムの開発、製造、販売

▷従業員数 271名 ▷本社 東京都品川区